



光受寺通信

毎年の事ではあるが、この時期は仏華としてお供えできるお花が、ずいぶん少なくなってくる。水揚げがよく、ある程度丈があって長持ちする花はほとんど無くなってしまふ。たとえ根気に水を換え、花を長持ちさせようとしても、3~4日が限度といったところである。油断をすれば水は腐り、ぬめりが発生し、拳句の果てには花が枯れてしまふ。しいて言えば仏華としては菊が最適な花ではあるが、花瓶(かひん)6杯分を常時用意することは、経済的に大きな負担となってしまう。

幸い当寺には、一年を通して様々なお花を何かと工面しては、お供えして下さるご門徒さんがあることから、今のところは何とかお莊厳(しょうごん)としての体を保っている状況ではある。

最近では造花技術も進み、本物と見間違えてしまうほど精巧にできている造花もあるということから、いっそ造花にと、心動かされないでもないが、「莊厳」の意味からすると、どうしても思い切りがつかないのである。しかしながら、報恩講に使われる松などは、花屋さんでも年々手に入りにくくなっていることから、やむを得ず造木?にするか、代用の木を探すかの選択をしなければならない時期に来ているのではないかと、心悩ましている今日この頃である。

「莊嚴」とは浄土の絶対性を直接認識できない私たちのために、それを具体化、具現化し、私たちが力づけるはたらきを有し、私たちと浄土の媒介となるもの。(すべての衆生を救おうとする本願から湧き起こる阿弥陀如来の功德)とある。…親鸞仏教センター 東本願寺

……親鸞聖人は2回結婚された……

「玉日姫と恵信尼 その1・赤山明神の出会い」

MMさん

親鸞聖人の事跡は不明なところが多いのですが、存覚が書かれた「正明伝」には詳細な事跡が書かれています。ところが「正明伝」は、正確な記述とは認めがたいとして学会では無視されています。しかし梅原猛氏は、存覚は親鸞聖人の直系であり、記述の内容もつじつまが合っており、安易に無視できないとして、「正明伝」をもとに独自の考証をしておられます。今回は3回シリーズでその一部を紹介させていただきます。



親鸞聖人 範宴ごの結婚への奇しき縁は、赤山明神での高貴な女性との出会いから始まります。出会いのあらましは次のようです。

範宴26才のとき、都での仏事を終え比叡山に戻る途中、赤山明神にお参りしてごとき、木の間から高貴な女性があらわれます。そしてよりそつよつに近づくと、「わたしは、かねて比叡の教えを乞いたい」と願っておりましたが、きょう思い立ち「ここへ参りました、どうぞ、お山へお連れ下さい」とすると範宴は「お志は尊いのですが比叡の山は女人禁制のお山です、お連れするわけには参りません」と答える。袖にすがって「あなたさまは、情けないことをおっしゃいます、伝教大師が智者であるなら、涅槃経にある「一切衆生悉有仏性」を「存じでしよつ、また比叡山には鳥や獣がいます、オスもメスともに住んでいなくてはなりませんか、なにゆえ人間のみ差別するのですしよつ……しかし決まりとあればやむを得ないこととす」と言つと、ふところから絹のふくさを取り出し、水晶の玉を見せます。『これは太陽の火をとりこむ玉です、仏教は高嶺の花であつてはなりません、低く卑しき谷に流れてこそ尊い教えになるのです、あなたさまは末代までの聖人です、それゆえ差別の仏教をあらためることができません。……この玉のことは、今は「存じないでしよつが、千日の後に思い知ることになりますよ」と言い残して木の間に行きました。本文には「かの玉を献上せし化女は功德天女にてありける、本地は如意輪観音にてまします」とあります。

この邂逅が親鸞聖人の、その後の人生を暗示するものとなりました、次回は「八角堂の夢告」をご紹介します。



大正十一年九月撮影の才市さん

島根県瀬摩郡温泉津町
字小浜
昭和7年83歳で亡くなる。
50歳ごろまで船大工。
その後履物職人として
生計を立てる。

才市の歌

○あさまし、あさまし、
邪見(驕慢)

じゃけん、京まん、あく
さいち。

じゃけん、京まん、あく
さいち。

ひとつのものわ、なんぼ
でも、ほし。

ひとつも、ひとつも、
ほし、ほし。

ほしいののがは、あ
あさまし、あさまし、あ
さまし、あさまし、じゃ
けんものこわ、このさ
いちが(けい)、
このさ(けい)、ひらが
恐(けい)
をそれてをります、
それに、ひとがしらん
と、
思(けい)
をもうております。



角が
生えてい
ます。
頭に

○ありがたいな、ごおん、お
も(けい)、みなごおん。

「これ、さいち、なにがごお
んか。」

「へ、ごおんがあります
よ。」

このさいちも、ごおん(けい)
きました。

きものも、ごおん(けい)
でき
ました。

た(けい)のものも、ごおん(けい)
ました。

あしには、へ、はきものも、ご
おん(けい)、ききました。

そのほか、せかいにあるも
の、みなごおん(けい)できまし
た。

ちやわん、はしま(けい)でも、ご
おん(けい)でき
ました。
仕事場)

ひきは(けい)でも、ごおん(けい)
きました。

ご(けい)ご(けい)くみな、な(けい)も
だ(けい)び(けい)ご(けい)ります。

ごおん(けい)うれしや、な(けい)も
だ(けい)ぶ(けい)。

お得度いたしました。

S Mは六月七日(けい)

「ご本山においてお剃刀を済ませ、仏弟子とし
ての歩みを始めました。
法名は 釈尼順蓮 ぞう。

この法名に込められた願いは、
俗名 M

仏陀の教えに順って、仏陀の覚りの蓮の花を咲
かせてほしい。と(けい)ご(けい)から(けい)ず。

皆様もぜひ生前に帰敬式を受けていただき、
覚悟ある人生を歩んでいただけたことを願っ
ています。詳細は住職にお尋ねください。」

ご報告と、ご案内をいたします

仏教公開講座

今年も七月から毎
月始まります。
岐阜別院にて
午後6時半～
毎回 500円

今月は七月二十日
講師 池田勇諦氏

暁天講座

七月二十五日(けい)
六時半より
安八町森部 照源寺
講師 池田徹氏
三重県桑名市
西恩寺住職
協賛金 三〇〇円

ぜひお出かけくだ
さいますようお願い
内申し上げます。

今月の学習会

七月十一日(けい)
午後七時より
法話 若院

学習会 座談会

写真提供 森 光明



御恩に包まれて生きる、才市の
喜び。人生の大転換が窺い知
ることが出来ます。

下駄をひく(けい)に専念し、法悦がわ
くと下駄の木の削り屑に歌を書きつけ、
夕食後には、仏壇の前で清書することが
楽しみであった(けい)。

聞法生活のきつかけとなったのは、二十
歳前後のころに賭博で警察に捕まったこ
とらしいが、安楽寺の世話方同行として
熱心に聞法に励んだ(けい)。

しかし、聞いても聞いても仏法が分か
らず、何度か挫折し(けい)になったとい
うが、心の物足りなさや、不安が残り、落ち
着かない毎日を送ることになったとい
う。

再び聴聞が始まり、その後二十四、五年
ほど聞き続けた(けい)。

そして、五十歳過ぎになった(けい)から、
いつかはなしに仏智の大悲の不思議さが
知れてきたといわれ、六十歳(けい)には自
ずと物事を宗教的に眺め、味わうよう
になっていった(けい)もいわれている。またこの
ころから「歌」を書き始めた(けい)。

参考：鈴木大拙 『妙好人』法蔵館

自己反省、批判が生まれ、
やや、宗教的なものが感
じられる初期の歌。

新聞原稿 募集中(8月号)